

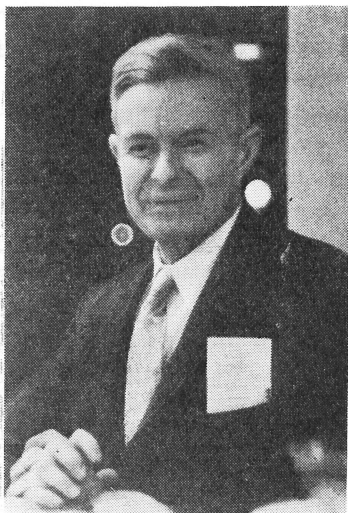
## 雲物理学者の横顔

孫 野 長 治\*

今春3月末に第6回レーダー気象学会に出席した際、はからずも多くの雲物理学者に接する機会を得て、論文の上の氏名の綴りだけの概念しかなかった彼等を視覚・聴覚の面からとらえることが出来た。そのことにどれだけの意義があるかは判らないけれども、筆力の足りないところは写真で補って報告してみたい。

### ブルークス教授

ボストンに到着してとりあえずハーバード大学ブルーセル気象観測所に所長のブルークス教授を訪ねた。折悪しく土曜日のため不在であったが電話で連絡のとれ次第、車で山頂の観測所へかけつけてくれた。中谷先生の「Snow Crystals」の出版を引受けられた人で先生から



ブルークス教授

大変人のよいお爺さんと聞いていたが、初対面から全くその通りの感じであった。耳が少し遠いらしく補聴器をつけておられた。私の英語はどれくらい通じるか心配していたが、案の定すこし込み入った話はうまくゆかなかった。こんな時のために手帳を用意していたので旅費の計算は筆談ですませた。後日この手を用いようとすると大抵の人は「書くのは止めなさい。話でゆこう」という。筆談のもどかしさに比べれば私の英語の方が未だしものであるらしい。しかし耳の遠い教授と私の間では筆談の方が便利であった。

この晩はMITに留学中の気象研究所の小平博士と教授の官舎で夕食を御馳走になった。不時の客で用意ができなかった故もあろうが、グリーンビーンズと軽くいた

めた馬鈴薯それにピフテキ様の肉塊という質素なものであった。大きな肉の塊を教授自らナイフで薄く切って分配して下さったが私には少し焼きが足りないように思われた。皿に残った血をどうだと聞かれて二人とも謝わると自分でさっさと啜って平げられたのには驚いた。教授の官舎は古めかしいが13室もある2階建てで廿数名のお子さんやお孫さんが一度に来て泊められるんだそうで、それを楽しみに老教授夫妻だけで住んでおられる訳である。ケンブリッジ(ボストンの北隣り)にはこういう事情の旧家が多くて大学町のこととて多くは素人下宿になっていた。

旅費の点で大変お世話になったのでお土産に西陣織のネクタイを贈ったら、偶の部分に pure silk とあるのを見付けて「われわれは pure silk のネクタイなど買えない」と非常に喜ばれた。ディナーパーティーに早速つけて来られて胸をさすって誇示しておられた。

学会の長老格なので議論が沸騰すると教授が自ら立ってピシヤリとしめくくって結束をつけられたことが再あった。

### アトラス博士

ケンブリヂ空軍研究所のアトラス博士は今度の学会の主任者である。次の日曜日にボストンを案内するといって夫人・令息・令嬢と一家総出で車をホテルに乗りつけ、私のまだるっこい挨拶の終るのも待たずに肩を抱きよせてまるで旧知のような仕種である。同行のラドラム博士は夫人と面識があるらしく専ら夫人のお相手をしたので私はアトラス博士の話聞く成行となった。ニューヨークをニューヨーク、ニュースをヌースと発音するのが異様に聞えた。ボストン市内を一巡してからレキシントンの独立戦争の旧蹟を見て廻ったが英国人のラドラムの思わくなど一向に気にならないらしい。ずんぐりと肩巾が広く眼光も鋭い。最近の彫しい論文から想像される通りの精力的な男である。学会の最終日に彼を日本へ招待した場合の費用を胸算用してから、日本に来る気はないか、滞在費くらいならば負担できると誘ったら、「金のことは心配するな。ここ2、3年は忙しいが、それがすんだら行きたい」といっていた。アメリカ人は正直だから実現するかも知れない。

\* 北大理学部



向って左よりラDRAM博士、アトラス夫人、令嬢、アトラス博士、令息

米国気象学会理事長のフレッチャー博士から感謝状を贈られた時は流石の博士も固くなったようである。それでも感謝状を片手に同席の夫人にキスしてみせた。これは博士の人柄によるのではなくて米国の習慣によるものかも知れない。

### ラDRAM博士

英国から来たラDRAM博士とはずっとホテルも一緒であり、一緒に見物や飲み招待されたので非常に親しくなり彼の本場の英語にも慣れた。それにしてもペーパーをパイパー、レーダーをライダーと発音するのがどうも耳ざわりであった。6尺豊かな瘦身の好男子、鳥打帽をかぶりカメラをのしぼせた航空会社のボストンバッグを肩に、車の便がなければ何処へでも歩いて行く男である。一緒に会場まで歩いた時は彼の大作について行くだけで汗を流したことがある。議論好きな男で彼と一緒にいる限り私は口をはさむ機会がなかった。たまたま私がしゃべりかけるとドクターマゴノが話すぞといって皆きき耳をたてて注目するので誠に具合が悪かった。

アトラス家で一杯飲んだ時に3人で俸給や税金や家賃のことをこぼし合ったことがある。3人とも子供が小学生以下の2人で年も似ているので暮しは楽でないことは同様であるが米国・英国・日本の生活程度は大体10:3:1の割合であった。ラDRAMの議論好きなことは前にもふれたが、この晩はスエズ問題に話が移った。こうなると私の英語力では口をはさむことは出来ないし、中立の立場にあるのもっぱらきき役に廻ったが2人の議論は夜半までつづいた。ラDRAMは興奮してくると「アイゼンハワーのとった態度がいけない。イーデンは英国国民に訴えた。life or death, life or death! 云々」と大変な見舞であった。しかし最後に諧謔を入れてにこりとするとところはさすが英国人と思った。私は仲裁の言葉も思いつかないし何時果てるともない議論をあくびをかみ殺して拝聴していた。

学会でこんなことがあった。ラDRAMは積乱雲から最

初に降る大粒の雨は氷晶を核としたものではないと主張したのに対し米国の学者は一齊に反対しちょっと取捨つかぬことになった。この質問の口火を切ったのが私で万更でもない思いがした。ラDRAMのいる限り議論する機会がないので彼が帰国してから改めてブルーヒル観測所へ日本の雲物理学の紹介と議論にでかけた。アトラス博士の室で0°C附近で雪片が分裂する気配がありこの現象がブライトバンドに関係していると主張したら、博士はそれでは効きすぎる(計算してみると雪片が2つに分裂するとレーダーの反射力が1/36になる)といってなかなか承知しない。1時間あまり頑張ったが結局私がこの冬の実験を引受けることでけりをつけた。

### 司会者

学会にはMITのクレスチ会館の地下の会場があてられた。ちょっとした小劇場の趣があり音響効果も非常によかった。ピラを使う人はなく乾板または35ミリのスライドである。16mm映画を使った人も多かったが、中谷先生の「雪の結晶」のように映画会社に録音まで入れさせるといった豪華なものはない。

語学の不足を補うつもりで講演内容をなるべくスライドに書込んでおいてスライドの順に説明するという方法をとったが、司会のセッチフェルド博士(カナダ)にもっと大きな声で注意された。声の点で注意された4人の中、3人までが日本人であるから声量の点でもわれわれはハンディキャップを背負っている訳である。あとの講演で時間が超過したらしく「あと1分で終るか」と催促された。一般に講演時間は非常によく守られており、また休憩時間が終わっても集りが悪いと司会者が休憩室まで招集に来る。講演時間を厳守する代りに質疑応答の時間も確保してくれる。あまり議論が沸騰すると司会者自ら長老格の人にコメントを求めて締くりをつけてもらうようである。日本の学会に比べて司会者がこまかいところまで世話をやくし、また権威も持っている。

講演はされなかったがホートン教授の司会も非常にユーモアがあった。小柄で禿げたおでこに大きな口、眼鏡越しの眼光が鋭くて一見とつきにくそうな人であるが司会席に立たれると何となく愉快に見えた。カクテルパーティーでボーイに洋酒の組合せをきかれたが何もわからないから隣りのホートン博士と同じものと所望したら恐しく強いのをくれた。してみると博士も相当な酒豪ということになるが、私を基準にしたのでは問題にならない。ほんとうの酒豪は始めから別室のスタンダー席にとぐろをまいて御婦人を混じえたグループには見向きもしなかった。翌朝ホテルの食堂でラDRAM博士に昨夜は大部おそかったようだと言ったら「自分は12時に帰った。あそこの連中は3時までいた」と偶のグループを指した。誰が車を運転して帰ったのか知らないが驚いた連中である。

ペーミス博士は第一線を退かれて司会だけを務められたが背丈が抜群で英語もずるずる引張るような老人である。ディナーパーティの立役者でわざわざ学会場から運びこんだ映写幕を前に特別講演を行ったがどうも少し様子がおかしいと思ったら全部レーダー気象にちなんだ冗談ばかりでまんまと一杯喰わされた。渡辺博士の話によればMITのスタッフが一週間ばかりで考案した余興の由、これが終わってから大きな紙袋から玩具のジェット機を取り出して私にくれ、呼びこの笛をラドラムに贈り最後に消ゴムを出してこの会場で最も頭の輝いた人に贈りたいと申出たので満場騒然となった。結局誰がもらったか忘れたが、米加の気象学者には売けた人が多いようである。

### マーシャル博士

カナダのマックギル大学の人達は3次元のレーダー反射の映画の撮影に成功して大々的に発表した。ヒッチェルド教授が典型的な紳士ならば、ラングレーベン博士は頬がこけて言葉も少い真面目一点張りの学者であり、マーシャル博士は無精ひげをはやした大柄な野人である。スライドの縦横にならべた映画のコマの一つに美人の写真を挿入して得々としていた。よい年をして茶目が好きと見える。誰れ彼となく質問してギューギューやっつける。逆に自分が質問を受ける時はステータにどっかと腰を下ろしてゆうゆうと受けて立つ？と云った按配であった。休憩時間に隣にいたのでカナダはレーダー気象学会をリードしていると賞めたらとんでもないと照れていた。聞くところによるとカナダには気象用レーダー



マーシャル博士

は2つしかなく、英国も2つとラドラム博士は云っていたから、4つ持っている日本は世界で2番目であり、国の面積から云ったら世界一の密度で配置されていること

になる。早く全土をレーダーのネットで覆うて予報に役立てて欲しいものである。

### シェーファー博士

学会が終わってからスケネクタディにシェーファー博士を訪ねた。間違えて一つ手前の飛行場に降りてしまったので次の飛行機で飛んだが研究所を見学する時間は20分くらいしかなくなってしまった。彼が夜行列車でワシントンに出発するので同行したからである。どの分野にもいち早く手をつけた雲物理学の先駆者であるからさぞ精悍な人との予想に反しことに穏かな紳士で笑い声もコロコロと澄んで聞えた。別刷を集めてサインをしてくれている間に夫人に樋口君の雪の結晶面の氷蝕の写真をみせたら非常に興味を示した。中谷先生によれば、夫人が助手であり令嬢がタイピストという一家3人でミニタルブ研究所を経営している訳である。山小屋風の自宅にくっつけて研究所を建て地下が工場兼暗室、一階が研究室、二階がオフィスといったこじんまりした研究所であった。地下室の一隅に人工降雨の実験で有名なコールドボックスがあり、古ぼけたライツの顕微鏡等も見えて何となく昔の中谷教室を思い出させるものがあった。シェーファーには少し短か過ぎると思われるごく旧式のスキーがたてかけてあるので聞いたら、この辺を歩き廻るにはこれで充分で、また彼はテレマークが得意な由。

スケネクタディからワシントンに行く汽車の中でレーダー気象学会のラドラム博士の積乱雲の話をしたら「あれは英国だけの現象で米国人は誰も信用しないんだ」となかなか手きびしい批判をした。私の微水滴の分裂の論文をみて彼も以前にやったことがあると非情(?)にくわしい。あとで送ってもらった別刷をみると、私のやったようなことは大抵手をつけてあり結局かすしか残っていないという羽目になった。こういう意味でシェーファーは大変恐い人である。米国の気象学の研究施設をみせてもらってその規模の大きいことと自記器械の多いことの以外は別に驚くことはなかったが、シェーファーのやりかただけは感心したと云ったら、この方が金がかからないからと答えたので2人で大いに共鳴した。

### ガン博士

翌朝ワシントンの駅でシェーファー博士はタクシーをつかまえて私をのせ運転手に気象台行きを命じ、出発するのを見届けてから立去った。早朝のこととて気象台へはガン博士は未だ出勤していなかった。博士の大きな居室で待っているとほどなく現われた。思ったより年輩で白髪といったがよいくらいであった。坐るなり何か質問することはないかと改めて切出されたのには面喰った。昨夜の寝台はよく眠られなかったし、そう急にいわれても出て来るものではない。いろいろ議論している中にわからないところ例えば装置のことをきくと、その都度、実験室へ連れて行って説明し、また居室に帰って議



ガン博士

論を再開する。イオンの垂直分布のデータをただすと早速別室に行って大きな机のうえ一杯に自記紙をまき戻して並べてみせるといったピストン式のやりかたで研究所を一応見学したことになった。こういうやり方は如何にも精力的で少し捲舌なところなど黒田正夫先生を思わせる人であった。

一応議論が終わってからワシントンのその晩のホテルの予約をお願いしたら、隣室の秘書嬢に大声で命令する。秘書が4軒ばかりあたってくれたが何処も満員でことわられてしまった。博士は気毒そうに「時期が悪い。ワシントンは桜のシーズンだ。俺の力ではどうにもならないから近くにある日本大使館で助力を求めたがよい」と大使館の受付まで車で案内してくれた。

### バイヤース教授

シカゴで小元君に会ったら、私あての手紙が何本もバイヤース教授のところに届いているが本人が何時来るの

かわからないでこまっけていられるとの話があったとのことであった。随分気をつけて手紙を出していたのだが最後は電話でなければうまくないらしい。長距離電話は私の英語にとって最も苦手であった。

あってみると非常にの静かな鼻すじの通った品のよい老人で、ときばきたシカゴ大学中堅のスタッフとはよい対照であった。教授は気象学教室の長と、教室内の雲物理学研究室の長も兼ねておられるので両方に居室をもっておられる。教室本館の方の居室で気象学教室の最近の活動ぶりを拝聴したが、ゆっくりした講義口調なのでわかりがよかった。雨滴の成長に coagulation の効果を非常に重くみておられるようである。少し度が過ぎていのように思えるので納得しかねるような素振りを見せたら電場内における水滴の coagulation の16ミリ映画をみせて下さった。なるほどよく合体するのがわかるが画面はあまり奇麗でなかった。あとで別館の雲物理研究室を案内して頂いた。別館の方が立派である。主として航空機搭載用の気象学器械とくに大気中の含水量の測定に重点をおいているらしく雲粒の直接測定、電気抵抗式及び露点式の3通りの方法を併用していた。一方法だけであらゆる霧粒をつかまえることは出来ないそうである。空軍研究所のアトラス博士は「飛行機は整備とか何とかいって使いにくいから使わないことにしている」とこぼしていたがシカゴ大学ではうまく行っているらしい。午後雲物理学関係者だけの集りで最近の日本の雲物理学の進歩と題して講演した。

例によってスライドに頼ったが用意が不充分でよく通じなかったかも知れない。

翌日の夕食は藤田博士の宅で日本料理を御馳走になった。バイヤース教授夫妻、東島博士夫妻、あとで小元君も加わって大変にぎやかであった。教授はとくに話されるわけではなく、ただ日本人の英語を楽しそうに聞いておられるだけである。日本料理がバイヤース夫妻の出席された条件であり目的でもあったそうである。

### 一紹介

#### 地球と宇宙

島村 福太郎 編 理論社 1957年9月刊  
286頁, 320円

内容は3つの部門, "日本をとりまく気象", "地球と日本列島" "宇宙のしくみ"に分かれており, 気象については気象研究所衛生気象研究室長の神山恵三氏, 日本列島については東京教育大学助教授の大森昌衛氏, 宇宙については東京学芸大学助教授の島村福太郎氏がそれぞれ執筆している。

"日本をとりまく気象"では日本における1年間の季節の移り変りを代表的な気象現象を通して述べている。この書き方は目新しいものではないが、従来の本と全く趣

の変わった新鮮味があるのは、氏の専門的研究を生かして気象現象をわれわれの身体や生活に対する影響にまで掘り下げて述べてあるからである。気象と生活とを結びつけることにこれほど成功したものはないだろう。

"地球と日本列島"では地震、火山、地下資源、海洋を生活に関連させて興味深く書き、最後に地球の歴史を述べて結んでいる。

"宇宙のしくみ"では"人類の生活が変るにつれて世界観がどのように進んで来たかを述べた後、現代の新しい宇宙観が明確な筆で描かれている。

本書全体を通じて、科学をわかって貰おうという筆者の親切さがにじみ出ており、ごく最近の知識までが、わかり易い筆致で与えられている。(有住直介)